



Title	中学生の仲間集団における排他性とその深刻化要因に関する検討
Author(s)	鈴木, 修斗
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16804号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16804
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99649
Type	doctoral thesis
File Information	SUZUKI_Shuto_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：鈴木 修斗

主査 教授 加 藤 弘 通
審査委員 副査 教授 金網 知征（香川大学）
副査 准教授 大谷 和大

学位論文題名

中学生の仲間集団における排他性とその深刻化要因に関する検討

仲間はずれや陰口といった関係性攻撃は、いじめの中でも対応が難しく、ときに自死などの深刻な結果をもたらすいじめの一様態である。本論文は、排他性という観点から、中学生の仲間集団およびそれを取り囲む学級がどのような状態にあるときに、関係性攻撃がより深刻な問題となるのかを検討し、関係性攻撃への対応に向けた実践的示唆を得ることを目的とする。

研究 1 では、排他性に関する先行研究を概観し、従来の排他性概念に「内阻害」と「外阻害」という新たな区分を導入した。内阻害とは、自集団に新たなメンバーが加入することを阻む排他性を指し、外阻害とは、集団の成員が集団外の者と関係をもつことを阻む排他性を指す。従来の研究では、これら 2 つの側面が十分に区別されてこなかった。そこで本研究では、この区別の妥当性と有用性を検討し、排他性がどのような状態にあるときに関係性攻撃が深刻化するのかを明らかにするため、以下の 3 つの目的を設定した。第 1 に、排他性を内阻害と外阻害の 2 側面に区別することの妥当性を検討することである。第 2 に、この 2 つの観点から、どのような条件下で排他性が関係性攻撃につながるのかを明らかにすることである。第 3 に、学級内に存在する周囲の集団の排他性も視野に入れ、排他性が関係性攻撃をより深刻なものにする条件を明らかにすることである。

研究 2 および研究 3 では、内阻害と外阻害を測定可能な排他性尺度を開発した。その結果、排他性の中でも外阻害が孤立や抑うつと関連していることが示され、関係性攻撃を検討する際には、内阻害と外阻害を区別して捉える必要性和その妥当性が確認された。

研究 4 および研究 5 では、排他性がどのような条件下で関係性攻撃につながるのかを明らかにするため、仲間外れを「する側」と「される側」という 2 つの視点から、排他性と関係性攻撃との関連を検討した。その結果、仲間外れをする側・される側のいずれにおいても、内阻害よりも、成員が集団外の者と関係をもつことを阻む外阻害が関係性攻撃の発生と関

連しており、性差は認められないことが明らかになった。

最後に研究 6 では、排他性がどのような場合に関係性攻撃をより深刻なものにするのかを検討するため、公立中学校 5 校 51 学級、計 1,496 名を対象に、関係性攻撃と抑うつとの関連を、学級内における集団間移動のしやすさという観点から分析した。その結果、集団間の移動が困難な学級においては、関係性攻撃と抑うつとの関連がより強くなることが示された。具体的には、所属集団の外阻害が高く、集団外の者と関係をもつことが難しいことに加え、周囲の集団においても内阻害および外阻害が高い場合、すなわち、集団内に外部の者を受け入れにくく、かつ成員が集団外の者に関わることを抑制する状態にあるとき、特定の集団で生じた仲間外れが、より深刻な影響を及ぼすことが明らかになった。したがって、関係性攻撃そのものだけでなく、それが生起している学級の状況によって、関係性攻撃がもたらす心理的ダメージが増幅されることが示された。

以上の結果を踏まえ、総合考察では、自らが所属する集団の排他性および周囲の集団の排他性という 2 つの視点から、関係性攻撃といういじめがどのような条件下でより深刻なダメージをもたらすのかを整理した。また、その知見にもとづき、関係性攻撃の深刻化を防ぐために、学級の状態を評価するためのモデル図を作成し、実践的示唆として提示した。

審査委員会は、本論文の意義を以下の 3 点に認めた。第 1 に、排他性という既存の研究領域に対して、十分な調査数と洗練された統計手法にもとづき、新たな理論的視点を提示した点である。第 2 に、排他性が特定の集団に限定された問題ではなく、学級内の複数の集団が相互に関係する複雑な現象であることを、実証的データにもとづいて明らかにした点である。第 3 に、本研究の知見が、排他性研究にとどまらず、いじめにおける傍観者研究を前進させるものである点である。従来の研究では、傍観者の存在と被害の深刻化との関連が指摘されてきたが、本研究は、内阻害・外阻害という枠組みを用いて、いじめが深刻化する過程において周囲の生徒が何をしているのかまでを明らかにしており、その学術的意義は大きい。

以上の理由から、審査委員会は、本研究が心理学研究に対して高い貢献を果たしたと判断し、本論文の著者が北海道大学博士（教育学）の学位を授与されるに値すると認めた。